

2011 年 8 月 24 日 公の精神でつながるコミュニティー「一志会」の第 5 回例会が開催されました。

企業経営者が「公の精神」を持って積極的に社会と関わっていくことを目指した新しい形の会員制の”コミュニティー”である「一志会」の第 5 回例会を、8 月 24 日に開催しました。例会も回を重ねてきたことで、メンバー間の繋がりが深まってきて、和やかな雰囲気の中で始まりました。

今回は、冒頭、一柳から海外の動きを交えて最近の政治経済情勢についての認識、トップリーダーの重要性などについて話しをした後、お招きしたゲストの室瀬和美氏（人間国宝・漆芸家）と福川伸次氏（機械産業記念事業財団会長、元通産省事務次官）から卓話をいただきました。



室瀬氏からは、漆芸は海外では「JAPAN」と称され古くから賞賛されてきたが、日本では明治に入ってから文明開化・欧化主義のあおりを受けて存在感が薄れてしまった。戦後、無形文化財（伝統工芸）に対する認識が漸く高まり、いわゆる「人間国宝」制度（昭和 29 年）ができて、昔から伝わる「ワザ」を後世につなげることの大切さが理解されるようになった。伝統とは、伝承（形をかえないまま伝えること）とは異なり、形は時代に応じて変えながら古来の材料・技法によって創作するものであること、とりわけ漆芸は日本で際立って発展してきたものであり、日本人の感覚を生かしたデザイン力が発揮されている。企業においても、デザイン、イメージについてもっと重視することが必要でないか、と穏やかな中にも熱っぽく語られました。



また、福川氏からは、「産業の新しいトレンド」と題して、日本の産業力がここ 20 年来、停滞・低迷してきている中で大震災・原発事故などに見舞われ、一気に様々な課題が露出したが、企業家は今こそ「自立の精神」を持つべきである。今後の社会は、「人間価値社会」に向かうので、これに即したマーケットイン（需要誘発型）の考えに徹したイノベーションを図っていくことが重要である。消費者の価値観の多様化が一段と進むので、日本文化の特色（知とワザの融合、思いやりの精神、自然との共存など）をいかした産業と文化の融合による新しいアートの時代にふさわしい事業展開を目指すべきである、と幅広い観点からで刺激的なお話をいただきました。メンバーからは、ゲストに質問が相次ぎ、関心の高さが窺われました。



この後、プライスウォーターハウスクーパースの椎名パートナーから恒例のメンバースピーチ、続いて他のメンバーからの近況報告などがあり、ゲストも交えた懇談の輪がいくつもでき、賑わいました。